

茶の湯のコミュニティー — 『天王寺屋宗達他会記』に見る交友の時系列分析—

山田 哲也

同志社大学大学院文化情報学研究科博士後期課程・今日庵文庫

矢野 環

同志社大学文化情報学部

茶会記の客組からネットワークを生成し、その構造を分析すると、特に千宗易（利休）と天王寺屋一族との興味深いネットワーク形成が見て取れる。従来の茶会記研究では把握できない茶会記の総体的把握と、時系列な状況を、見易く提示する。

Communities in Chanoyu -Time series analysis of friends and acquaintances in the record “Tennojiya Sotatsu Takaiki”-

Tetsuya YAMADA

Graduate School of Culture and Information Science, Doshisha Univ., Konnichian Library

Tamaki YANO

Faculty of Culture and Information Science, Doshisha Univ.

We construct a network from the list of guests in records of Chanoyu, and analyse its structure. This study reveals the intimate connection with Sen Soheki (Sen no Rikyu) and the Tennojiya financial combine. Those results have not gained by the classical approach to records of Chanoyu. We also exhibit the time series analysis on the generation of the network.

1 分析対象

従来の「茶会記」研究では試みられることのなかった茶人のネットワーク形成を「茶会記」の数理的分析により抽出し、まずそこにおける歴史的問題点を提示する。

その一例として千宗易（利休）と堺の天王寺屋一族との相関関係が取り上げられる。そこには堺の茶の湯界における利休の位置といったものを見て取ることができよう。

1.1 茶会記

ここにおいてネットワーク形成の対象とするのは、『天王寺屋宗達他会記』である。本他会記は、津田宗達により天文十七年（1548）から永禄九年（1566）の29年間にわたって記録された。戦国期に書き始められた茶の湯者

の寄合の記録である「茶会記」には、自らの茶会を記録した「自会記」と、招かれて参会した茶会の記録である「他会記」の二種類がある。当然ではあるが、自らの茶室で所蔵道具を用いたものである「自会記」に比べ、他者に招かれた際のものである「他会記」のほうが、使用された道具など豊富な記述が遺されているのは言うまでもない。現存する戦国期から、安土・桃山、江戸初期の茶会記、「松屋会記」・「天王寺屋会記」・「今井宗久茶湯書拔」・「宗湛日記」が、「天王寺屋会記」を除き、いずれも「他会記」であることは、残存した理由の一つがその豊富な記述内容＝茶会情報によるものであることは想像に難くない。なかでも「天王寺屋会記」は、堺の豪商天王寺屋津田家、宗達・宗及・宗凡の三代によって書き継がれ、「自会記」・「他会記」共

に備わるもので、その質・量ともに膨大なものである。また整理された痕跡が見られるとは言え、自筆であるという点においても他の茶会記が後世の写本であることを考慮すれば、まさに別格の存在であると言えよう。

今回は『天王寺屋宗達他会記』の客組のデータをその影印本から採取した。当該史料はすでに活字化されて久しいが、二度目の活字化の際、全巻の影印本が添えられており、活字の校訂作業が可能なるものである。先人の御苦勞は十分尊重すべきではあるが、影印本が公刊されている以上、史料として扱う場合それを優先しなければならないのは当然のことであろう。活字化の際見落としていた文字や、曖昧にしていた人物の特定を影印本の字面を追うことで厳密に処理することができた。また「自・他会記」の本文の比較検討作業も併せて行いこれらの作業を行った。

1.2 校訂の例

この作業によって、従来あいまいであった点が修正された例をあげる。

1. 本文中に出てくる文字「千」と「干」は運筆に注目し、第一画が右から入って左にいったらば「千」、左から入って右にいったらば「干」と判断した。これにより「干」一文字で表記されることがほとんどの「不干」という人物と「千」という人物を区別できた。

2. 本文中で「仙」一文字で表記される人物について、特定できる候補に「錢屋宗仙」と「松江隆仙」がいる。「隆仙」の場合「隆泉」と表記された例もある。ここでは「自会記」と「他会

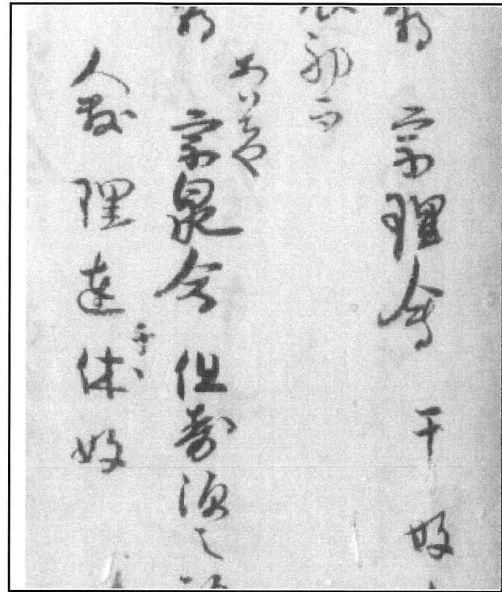


図1 千と干。天文廿一年。自会記

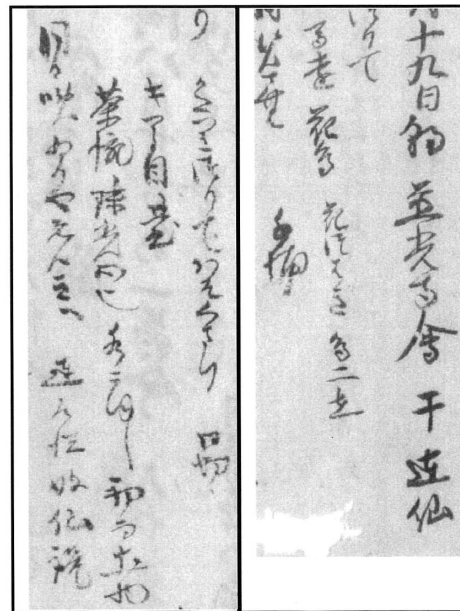


図2 左：永禄二年十月十八日 錢屋宗仙、
右：永禄四年十一月十九日 松江隆仙
記」の内容の比較検討から、「錢屋宗仙」は永禄

三年三月以降「自会記」に登場しないので、これ以降「他会記」に出てくる「仙」という人物は、「松江隆仙」と判断した。

3. 「若狭屋宗可（若彦三）・「さやや彦左」活字本では同一人物「さやや」を「若さや」と。二人が同時に出席する茶会はないが、それぞれが出席する茶会に共通して登場する人物「開想」より「宗可」は座次上位、「さやや彦左」は下位。故に二人は別人と判断。

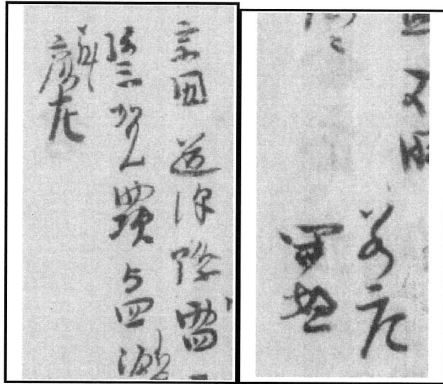


図3 右：若彦、開想。天文十七年十二月
左：弥三、さやや彦左。天文十九年三月

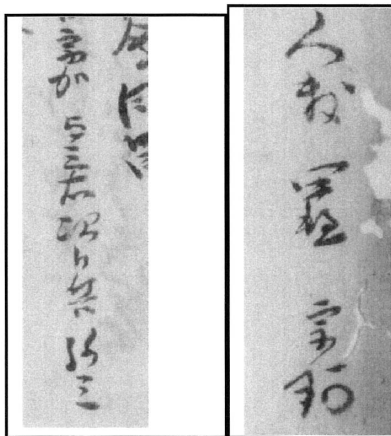


図4 右：開想、宗珂。天文廿年二月十一日
左：宗加、弥三。天文十八年十一月廿二日

同様に「宗可」と「宗珂」も活字では同一人物。上記同様共通して登場する人物「開想」より「若彦」こと「宗可」は上位、「宗珂」は下位。故に別人と判断した。

このように活字本では見逃すか、曖昧にしていた人物を特定した上で、基本的に Excel のデータシートに茶会毎の亭主と客を入力した。

2 DPclust

通常、データの親近性は対応分析やクラスター分解、あるいは系統的に考察することが多いが、この場合はあまり適切で無いことがわかる。そこで解析のための手法としては、ネットワークを構成し Graph Clustering を用いて構造を考察し、密な関係を持つ部分ネットワーク（クラスタ）を見出し、その性質を分析することにする。

使用するの比較的新しい手法の DPclust: A density-periphery based graph clustering software である。

そこで、宗達他会記の客組みを元に、頂点を茶会の亭主または客とし、亭主—客 という関係を辺とするネットワークを作成する。それは図5のようになり、234個の頂点と、680本の辺（重なり有）をもつ。また、頂点の重複を許すクラスタリングをおこなうと、28個のクラスタ（部分ネットワーク）を得る($C_p=0.5$, $density>0.6$)。其のクラスタ同士の関係は図6のようになる。また、 $density=1$ （完全多角形）のクラスタを求めると21個がある。その最大は、千宗易（千利休）が属する完全七角形であ

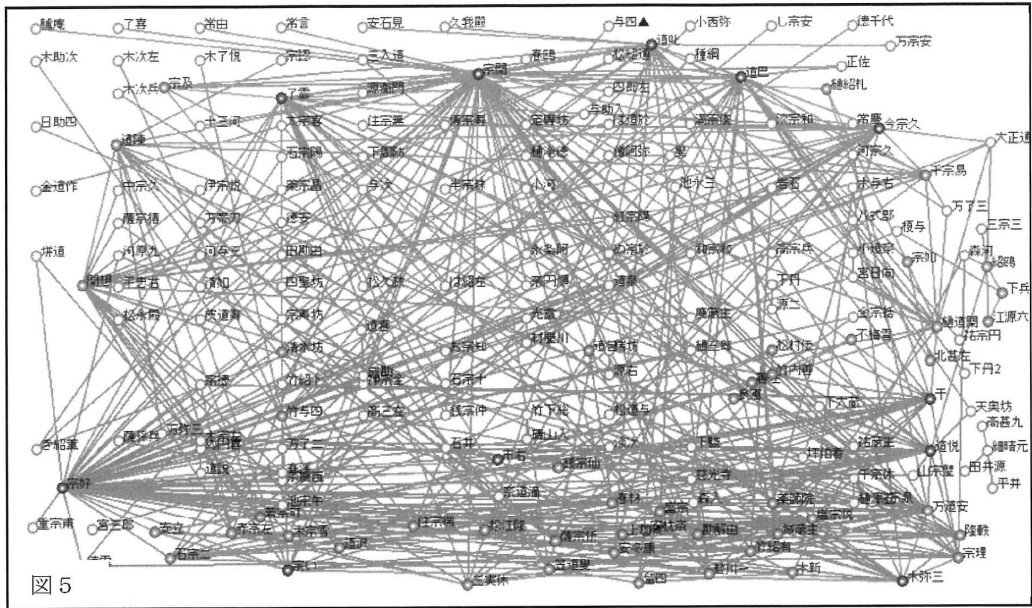


図 5

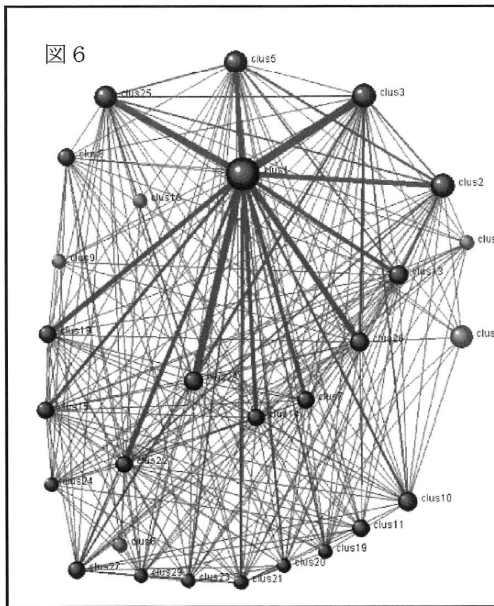


図 6

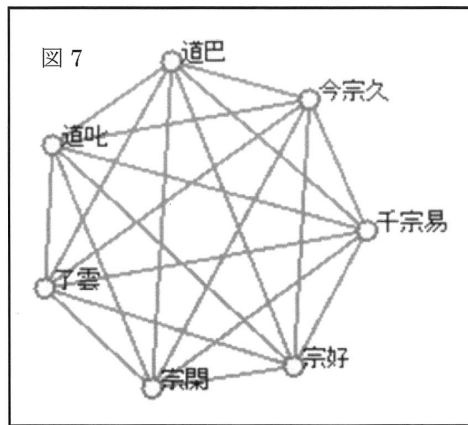


図 7

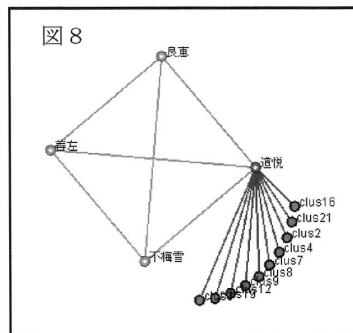


図 8

る (図 7)。即ち、千利休は天王寺屋グループと宗達 (永禄九年没) の頃既に深いつながりを持っていたことが解った。そこで、その繋がりがどのように形成されたのか、時系列でみてみることにしよう。

3 時系列で見る

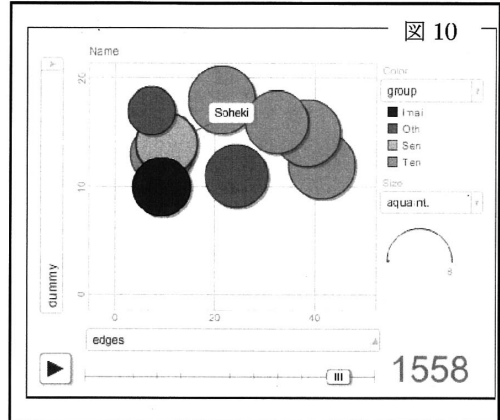
西暦	回数
1548	1
49	31
50	29
51	15
52	18
53	7
54	10
55	6
56	25
57	27
58	48
59	34
60	41
61	37
62	32
63	38
64	27
65	17
66	2
総計	445

今回は「宗達茶会記」中の客組の時間的推移を追うことを試みた。茶会における客組とは当日の茶会参加者の構成をいう。他会にせよ自会にせよ、そこには亭主の意図がはたらく。例えば仲の悪い者同士は呼ばない。

まず「宗達他会記」での茶会の回数を年毎で並べてみると、左のような展開を見せる。

クラスタごとでは解りにくい。そこで特定のクラスタに限定してみる。千利休と完全七角形をなした7人に関係の深い2人を加えた9人について、年を経る毎に相互

に何度顔を合わせたかを、辺に数字を付記して動画とすれば、中間の年では図9の様に成る。なお、グラフ図示にはPajekを用いた。また、利休が時系列に何人と知り合って行ったかを円の大きさで、横軸に図9での辺に付記した総



顔合わせ回数を用いて Google バブル図で動画表示した、永禄元年の状態は図10である。

参考文献

[1] M.Altaf-Ul-Amin, H.Tsuji, K.Kurokawa, H.Ashahi, Y.Shinbo and S.Kanaya: A density-periphery based graph clustering software developed for detection of protein complexes in interaction networks. In International Conference on Information and Communication Technology, 2007. ICICT '07. March 2007,37-42.

[2] 茶の湯のコミュニティー —天王寺屋宗達茶会記の数理的分析—. 2007 年度同志社大学文化情報学会大会講演. 2007.12.15.

